

文書作成モデルと時間経過の二重性、動きの表象

Effects of Duality in Time Recognition on the Expression of Japanese Text

東京外国語大学 総合国際学研究院教授

佐野 洋

東京外国語大学 総合国際学研究院教授 (情報工学)

✉ sano@tufs.ac.jp

☎ 042-330-5367

1 報告のことは

1.1 常識

大森はいう。時間は流れたりしないし ([1]: 78 頁 ~ 102 頁)、その時間を創り出す空間を人は把握ができない ([2]: 114 頁)。「たえず動いている点、現在の瞬間」は存在することはなく ([3]: 230 頁)、時間を線で描くこともできない ([3]: 228 頁)。巷の文法書にある線分状の時間表現は、物理時間としても心理時間としても誤りであるが、しかし現代的な文法論は、言語がどのように用いられるのかの価値判断をできるだけ避け、すなわちエコが指摘するように、「記号によって媒介されるシニフィエ (意味) とは無関係に、この記号のシニフィアン (記号) 面の内部構造を研究する」 ([4]: 31 頁) のである。

言語記号が内部に持つ表現上の常識的な解釈を詳らかにすることだが、冒頭に挙げた大森は、危険な常識の一つの表現に「現在が時間軸の上を過去から未来に動く」という叙述を指摘する ([2]: 68 頁)。経験する現在の時間を大森は、「経験現在」と呼び ([1]: 100 頁)、「時間順序の軸である過去と未来とは全く異質なものとして考えること」という。それを、ベルクソン ([5]: 17 頁) は継起する「持続」であると指摘した。九鬼は、「通俗の時間概念は「分量時間」に過ぎない」、すなわち「時計で測るものは流動的時間ではない」、と説き ([6]: 71 頁)、内井 ([7]: 107 ~ 114 頁) は、同時存在と時間の相対性を丁寧に説明してくれているけれども、例えば、「東京スカイツリーの展望台では、1 日あたり

4.26 ナノ秒、地上よりも時間が速く進んでいる¹⁾」と伝えられても時間と空間の相対性は理解できない。どうしても同質で流れゆく時間というお手軽で無難な解釈に傾く。

我々は時間を知覚できないので、止むを得ず概念による思考に頼り、通俗の時間概念で時間を表現する。さらに物事の時間を通じた変容である動き (動作や行為) と変化 (状態や属性) も、目にはしているが知覚できない ([5]: 207 頁) から、ベルクソンがいう不動性と不変性という二つの観念を無意識に持ち込み、通俗の空間概念と言語経験で表現する。思索においては致命的 ([5]: 230 頁) で、知覚偏執な錯誤 ([1]: 83 頁) と指摘されるが、位置 (形) と状態 (質) を同時に把握ができないし、動きよりも位置に、変化よりも状態 (質) に関心を持つほうが実践的に有益なのである ([5]: 230 頁)。

1.2 記号過程

この通俗の空間概念と言語経験で外界の有様を表現すること—「あるものを他のものの代わりにし得るという過程」は、記号過程と呼ばれる ([8]: 22 頁)。ハヤカワは「ことばを通してわれわれに達する世界を、自身の経験で知り得る世界と対比して言語的世界」と呼んでいる ([8]: 31 頁)。言語的世界は記号を通じた報告によって作られ、それは地図に例えられる。経験を通じて知覚的に理解する現場でなく、知識と推論に頼って思考

1 光格子時計の性能確認のために行われたという。https://scienceportal.jst.go.jp/news/newsflash_review/newsflash/2020/04/20200407_01.html

的に理解する地図である。この一般意味論観点の考え方（[4]：181頁）は、情報通信技術が社会基盤化した現代情報化社会—記号経験の重みが増している現代の日常生活において、文章作法上まづもって知るべき原則だ。

例えば書き手は、それが意図していなくても不正確な地図を作ることができる。知識は言語社会的にも個人的にも更新されるから、以前は正確であった地図は知識更新に伴い役立たなくなつて破棄する必要もある。正確な地図を読み手が読み誤ってしまうこともある（[8]：33頁）。地図を正確に読ませようとすると、常識を含めて正しい知識で表現するだけでなく、推論の妥当性を担保する（[9]）ことも求められる。さらに読み手の地図を見る視力や視野を不用意に歪めないことである。歪めるというのは、判断を惑わせるような色付け言葉の使用（[8]：49頁）や感情を過度に刺激するような言葉使いである。

記号知覚が引き起こす個人的感情をハヤカワは、情報の内包に対照させて、語が持つ感化的内包の意味であると言った（[8]：73頁）。この感化のあり様は、脳神経科学の観点からソマティック・マーカと呼ばれている（[10]：180頁）。同書によると、「特別な感情で、経験や学習により形成されそれぞれの選択肢に付随したシナリオから予測される将来の結果と結びついたある種の感情」という。推論における情動バイアスと考えられ、脳内の扁桃体と前頭連合野眼窩部²が関わっているといわれている。

船橋（[10]：4頁）によると、情動に左右される意思決定による投資利益が、理性的な意思決定のそれを上回った研究事例が紹介され、情動の個体内の役割と個体間（自分と他者）の機能についても研究されているという（[10]：98頁）。個体間においては情動の同化と対比という二面性が見られ、例えば、他者の幸福状態への同化は感激や高揚で、対比は嫉妬や妬みである（[10]：106頁）。言語経験を通じて他者のあり様を感じることができるから、文に意味がある判断するときも、その際に情動の二重性の影響を受けるのだろう。

1.3 知ること

知ることは、外界にあるものを知覚を通じたイメー

2 額（ひたい）の下部で目の直ぐ上の辺り。

ジ³によって在るということを知る有表象知識論と、在るということを知ることを知る無表象知識があるという（[11]：95頁）、同時に内容が伴う。内容は概念や観念と呼ばれ、意味を参照される対象の形態（その有無と実在性）に結びつけることもある。言語表現されるものはすべて実在とする考え（[12]）もあるなど、知ることとはモノの捉え方に深く関係する。

知り得たことから別のことを知るには推論を用いる。言語的推論は、「知られていることを基礎に、知られていないことについてなされる叙述」（[8]：39頁）である。因果性や関係性についての知識をもとに、知り得た原因・理由を基に演繹的に推論する場合と、結果という知り得たことから、原因・理由を含めた関係性が在ること、または、関係性を知っていることを前提として原因・理由が在ることを推論する帰納法がある。論理的である推論法は、前者の一般的な事柄から個別的事柄を得る（知る）演繹的推論だが、日常普段の生活で用いる推論は帰納的な推論である。個別の事柄から一般的な事柄を得る（知る）もので、形式論理として妥当でないが、パーズは意識的で自己統制的な論理的思惟と主張し（[13]：25頁）、大森は日常生活の中で「全局的帰納法」は正当性を持つ（[2]：192頁）という。

1.4 通俗的な見方

時間を論じた九鬼は、西洋の直線的な時間の観念に対して、「東洋的と呼びうる時間、それは、輪廻の時間、すなわち繰り返される時間、周期的かつ同一的時間である。」（[6]：24頁）と指摘した。仏教には、輪廻転生に深くかわる刹那滅という時間観念がある（[11]：38頁、[14]）。これは、「この世のものはすべて瞬間的存在である」という考え方である。

物理時間としても心理時間としても誤りである直線の時間表現が文法書で用いられるのは、分析の対象とした言語記号に内在する体系を説明する上で、実践的に有益であるからだ。只、上述のように東洋には、周期的かつ同一的時間や瞬間時間の捉え方もあるから、通俗的に役立つ⁴のなら、これら周期的あるいは離散的な時間表現がテンスやアスペクトの説明に使えない道理はない。

3 ベルクソンのいう「イマージュ」（[29]）。

4 人が共同作業するための意思疎通の確保（[5]：110頁）。

蛇に似た形状を知覚すると恐怖の感情が発露する。認知を経ない情動反応で、感情先行仮説（[10]:8~9頁）というそうだ。視覚刺激が視床で処理され、その一部が直接扁桃体に送られ、この情動は生まれるという。認知を経ないこうした情動は「危険な状況下では、俊敏に反応することが非常に有用であり、(…略…)扁桃体が節約した時間は、生と死の分かれ道となる」（[10]:8頁）のである。同書によると一方で、情動が生じる前提が認知判断である認知先行仮説もあるといい、刺激が提示される文脈によると指摘する。

動きの不動性と不変性、在り方の形と質、内包の情報的と感化的、情動の同化と対比、直線時間と瞬間時間、感情先行と認知先行など、我々の外界・内界の至る所に遍在する二重性、その二重性は、思考の土台にもあるだろう。

Japio 産業日本語ライティング分科会(以下、ライティング分科会)の議論報告（[15]:39頁~44頁）は、思考内容を律する段階（「表す日本語」）の段（パラグラフ）作文に、二つの類型（共感型と説得型）があることを指摘し、それは物事の見方と思惟・推論とに関係付けられることを主張する。

思考することは、物事の意味（実在）が関わるし、推論や思惟は、物事の前後関係（時間の経過）が関与しなければ為し得ない。本稿は、段作文の二つの類型は、先に挙げた諸々の二重性の顕れであることを示す。

以下、2章では、ライティング分科会の議論報告の概要を述べ、3章で、段作文の2つの類型の背景にある思考とその表出（モノの捉え方と動きの表象の偏向、偏向によって選好される推論の方法、そして2つの表現世界の作り方など）について説明する。4章で、思惟特徴に基づく共感型段作文と説得型段作文の表現技法を説明する。

2 文書作成モデル

2.1 作文技法論と文書類型

横井の文書作成モデル（[16]）は、認識したり思考したりした内容の「表出過程の技法」論である。[17]で示したように、ことばの表出の背後には、不可逆的な産出過程があるとする考え方で、意識的な思惟・思考過程があることを前提として、思惟・思考過程には段階性

があり、思惟・思考の内容は、その段階に応じた表現様式や形式があるとする。このモデルを提示するにあたり、横井は、表現を特徴付ける文書特性を示している（[16]:11頁）。以下に文書特性の説明箇所を引用する。

(1) 軽快さを重視する

読み手が共通に持つ知識や推論に大きく委ねることを前提にテンポ良く伝え、読むことに軽快さや快適さを感じさせるようにするという文章特性。

(2) 正確さを重視する

読み手の知識や推論に依存する部分を各分野の常識的・共通的なものに極力絞り、論理的に緻密な内容を誤解が生じないように正確に表現し効率よく伝えるという文章特性。

(3) 厳格さを重視する

依存する読み手の知識や推論を、個別の読み手のものに左右されないように社会的・公的なものに限定し、さらに、主旨に反する読み方ができないように解釈を絞られるようにし、厳格に表現し伝えるという文章特性。

(4) 情感の豊かさを重視する

読み手の感興を刺激し、解釈を読み手の創造性に委ね、情感豊かに伝えるという文章特性。

(5) 対話性を重視する

読み手からの即時応答、読み手との対話に基づいて、書き言葉の記録性と話し言葉の即応性を併せ持つという文章特性。

横井はビジネス文書マニュアルの対象を、(1)~(3)（「軽快さ」、「正確さ」、「厳格さ」としている（[16]:12頁）。これらの性質は書き手の心構えを指しており、方法論的類型であって文章に内在するものでない。只、(1)~(3)の文章特性の説明表現に「知識」と「推論」という観念語が用いられていることから汲み取れるように、思惟に関わり、そして思考を特徴づけるものである。故に、横井は思惟や思考過程と言語による表出行為と結び付けた文書作成モデルを提唱したのである。

2.2 思考過程とライティング段階

思惟や思考過程と言語による表出行為—この表出過程には、「着想する」、「試みる日本語」、「表す日本語」、「伝える日本語」、「訳せる日本語」の各段階がある（[16]）。既に報告したように（[17]）、文書作成モデルの各段階

を認識・思考の類型と対応させると、「着想する－発想、創造」、「試みる－内観、省察」、「表す－言明、陳述」、「伝える－主張、見解」、「訳せる－転換、共有」などの観念で対応付けられる。表1に、ライティング段階と観念語を対応させて示す（[17]からの再掲）。

表1 ライティング段階と認識・思考

書き方段階	着想 ⇒	試みる 日本語 ⇒	表す 日本語 ⇒	伝える 日本語 ⇒	訳せる 日本語
表現特徴	独り言	メモ書き	思考内容を律する	情報の確かな伝達	多言語への中継ぎ
認識・思考	発想、創造	内観、省察	言明、陳述	主張、見解	転換、共有

合目的な表現態度の観点で、「表す日本語」の思惟・思考である言明と陳述を考えよう。この段階は、思惟に支えられ、日本語という言語を用いて、知り得たことや了解したこと、自らの考えや立場を正確に表現する部分に位置する。自問を通じて、表出した日本語表現を確りと叙述する役割を担っている。思惟－すなわち思考の論理を強く意識する日本語の思量・考量 (logical thinking) が駆使される段階であると言い換えられる。

2.3 作文作法における思惟

ライティング分科会では（[18]：68頁～70頁）、2018年（平成30）年度までに、ライティングを担う書き手の態度は、(1) 根拠（共有知識や一般事実）で正しさを主張する、(2) 信念（理性的な情感や情意）で価値を主張することで共通すると結論した。只、二つの技法は思考（思惟）の仕方が違う。すなわち共感技法は、結論からその根拠を推し量る、または根拠を積み上げて結論に至るという様式であり、意志技法は、根拠から結論を導く、または結論を先行させ、根拠を後から理屈付けるという様式である。これら思考の様式の違いと、ライティングステージの違いにそれぞれ相応する書き方の提案をした。

2019（令和1）年度、ライティング分科会では（[15]：25頁～46頁）、モノ見方の二重性の観点（「～がある」と「～である」）が、発想、創造や内観、省察にも深く影響を与えていることを議論し、文書作成モデルの「表す日本語（認識・思考の言明と陳述）」段階において、思惟方法が異なっていて、（最小の文章単位である）段やパラグラフの筋書きにおいても違いが見いだ

されることを議論した。

書き手の態度の第一点目（根拠と関係）は、思考の様式に関することで、合理的な思考態度である。第二点目（根拠や関係についての信念）は、表現の様式に関わり合目的な表現態度である。後者は、具体的な表現方法で合目的であるからライティングステージが異なると表出方法も違うと考えられる。

昨年度の議論から前者－思考の様式もモノの見方が強い影響を持つことを指摘し（止むを得ず実在論に向かう）、その違いが時間の捉え方を決定づけると結論付けた。動きは時間を通じての変化であるから、知覚や認知の対象のモノの捉え方は動きの表象に直に影響する。言語的世界にあって、動きの表象が表す意味は所謂、用言や動詞の意味であり、文章表現にあって叙述の中心をなす要素であるから、必然的に段（パラグラフ）の構造に影響する。

2.4 2つのパラグラフの型

段（パラグラフ）の構造を取り上げる前に、表1の再掲に近いが、図1に、横井の文書作成モデル（[16]）の概略構造を示す。

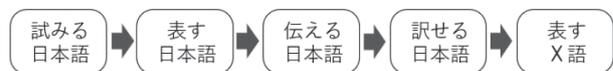


図1 ライティングプロセスモデル（従来）

2.3節で述べたライティング分科会での議論を経て、ライティングプロセスを図2のように修正した。

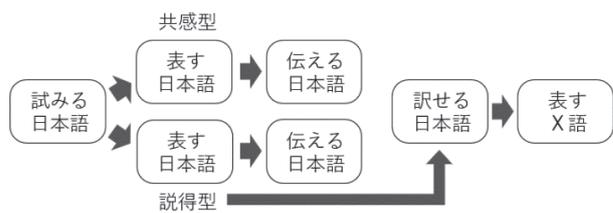


図2 ライティングプロセスモデル（提案）

「表す日本語」の共感型パラグラフと説得型パラグラフは、それぞれ共感技法、意志技法として議論した文章類型で、モノ見方の二重性の観点（「～である」と「～がある」）が方向づけている。「～である」は、モノの役割視点以外を無視し、「～がある」は、モノの外形部分を取り上げる。これは物事の実在そのものよりも、ベルクソンが指摘するように、「事物から私たちが引き出すことのできる利益を示している」（[5]：217頁）のである。

ライティング分科会報告書（[15]、39頁～44頁）には、二つの段作文ー「表す日本語」の共感型パラグラフと説得型パラグラフの思惟特徴の説明がある。只、この資料はポスター形式の体裁で、イメージ図を使った視覚表示と項目の列挙（箇条書き）の様式である。図や項目を提示した背後にある考え方の説明を欠いている。欠いた説明を以下で示す。当該の資料に挙げた「思考内容を律する言明、陳述」の段階に二つの書き方の類型があること、思惟・思考の二重性を述べる。

3 動きの表象

3.1 通俗的な時空間

時間と空間はともに不可知で知覚も認識もできない。「具体的な空間は物事から抽出されたものである。」（[5]：148頁）のだ。言語的世界の空間は、モノを知覚し、モノの意味（実在）を考える際の創造物である。この空間は、通俗的な空間概念である「空虚」である（[5]：148頁）。具体的な空間は、表象され記号化されたそれを意味するので、言語的世界の空間観念は通俗的である。

空虚とは無関係に、ヒトの知覚による特徴抽出は側頭連合野で行われているといい（[19]：138頁）、モノを認識するという事は、脳内に識別網状態がニューロンとシナプスで出来上がってわけで、認識できることは記憶しているということである（[19]：123頁～125頁）。

「一本の無限直線を時間軸としてとり、その上に気ままに一点を打って現在とする」（[1]：85頁）この背後には、「境界現在」という観念があると大森は指摘する（[1]：80頁～84頁）。それを作り出しているのは線形順序としての時間の捉え方である。言語的世界の時間は、通俗的な時間観念である「より前」と「より後」である。さらに間隔である分量時間がある。

時間の前後認識とは無関係に、脳は不完全な刺激から記憶を再生できたり、側頭連合野の電気刺激で過去の視覚経験を思い出せたりする（[19]：137頁）という。若しかしたら、脳内記憶の再生で「より前」や「より後」を疑似的に知覚して（推論して）時間観念を製作したのかも知れない。

3.2 動きは時間を通じた変化

モノの動きは時間を通じた変化である。前節でみたように、時間と空間についての言語的世界の表象は日常の現実を認識するものであり、記号が意味する観念は製作（[5]：116頁、152頁）である。以下では、ベルクソンのいう不動性と不変性という概念（[5]：205頁～235頁）から動きと変化の表象の違いを示し、連続時間だけでなく離散時間も言語的表現が利用していることを述べる。

3.3 不動性と不変性

空虚は間隔を設け個別位置に分解できる。分量時間は継起的な個別時刻である。動き（運動と変化）の表象（記号）は、運動を位置に分解する（不動点群から成り立つとする）ことと、変化を状態に分解する（不変点群から成り立つとする）こと（[5]：14頁～16頁、228～230頁）で、言語的表現の動きの意味が与えられる（実在化される）。「実践において、これほど至極当然なことはありません。」（[5]：226頁）となる。

3.3.1 位置変化と質変化

位置変化は、想像の点位置（開始位置と終了位置）の間にある変化であり動きである。そして、質変化は、想像の点時刻（開始時刻と終了時刻）の間にある変化であり動きである。位置変化と質変化のイメージ図は、ライティング分科会報告書（[15]：39頁）を参照してほしい。図中で、食パン一斤モデルが位置変化を表し、食パン一枚モデルが質変化を表している⁵。

動きの意味を生み出すモノの捉え方を考える。位置変化の特徴は、「モノは、開始位置と終了位置にあって意味（実在）的に変化しない」から、知覚的である。不動性が在ることが分かるモノ、つまりモノは外形（幾何）存在と見做そうとする（不変の外形が在るとは言っていない）。一方、質変化の特徴は、「モノは、開始時刻と終了時刻で意味（実在）的に、変化しない」から、認識的である。不変性が在ることが分かるモノ、故にモノは役割（機能）存在と見做そうとする（不変の役割が在るとは言っていない）。同報告書（[15]：39頁）では、質

5 食パンの名称は、[3]の227頁、236頁に掲載の運動の図や[7]の118頁に掲載の図を参照したものである。

変化について雲を使って例示している。天候を話題としたとき薄曇りでも降雨でも、在るモノとしての雲は雲である。

3.3.2 連続時間と離散時間

食パン一枚モデルは、離散時間と相対空間を示している。「この世のものはすべて瞬間的存在である」という極論ではないが、このモデルは、通俗的にいって少なくとも連続時間でないことを示す。というのも質変化は、日常生活の観点で見て時間経過長が不定であるからだ。例えば、「腐る」という質変化の時間経過は一定ではないし、通俗的に知覚できる、つまり裸眼の分解能で細菌などの活動を生き生きと観るような時間経過でもない。また、同報告書（[15]:42頁）の図例の「服が仕上がる」という動きの時間経過もまた不定である。しかも服が仕上がるという結果状態に至る経過は、自分で洗濯したりクリーニングに出したりと複数存在している。質変化に拠ると言語的表現は状態表現に偏る。この質変化は、物理や化学でいう相転移のイメージに近い。

一方、食パン一斤モデルは連続時間と絶対空間を示している。通俗的に日常生活の観点で、始点から終点までの時間経過の見積もりができる。動きの意味が知覚的であることにつながり、故に、移動表現は様々な経路表現が創造されること（[15]:42頁のイメージ図を参照）から、位置変化に頼ると移動表現に偏向する⁶。

6 英語の前置詞は30を超えるといわれ（[31]）、それに対して、日本語の後置詞は10程度である。

3.4 話しと語り

経験には、知覚する体験（体で分かること）と、認識する体験（頭で分かること）がある。二つの経験叙述の様式は言語的表現として話しと語りに二分できる（図3）。

言語の表現世界（自己と外界や内界）の表現特徴は、不動性の動きを下地にするのか、不変性の動きを土台にするかに依存すると考える。とりわけ話しの空間の表現は、食パン一枚モデルに頼る動きの表象と、食パン一斤モデルに拠る動きのそれでは、随分と表象記号に内在される意味（实在）が違う。

秦（[20]:26頁）は、英語の動詞の表す動作の意味を三相であると指摘したが、この分析の観点でいうと日本語の用言の表す動作の意味は単相である。ライティング分科会報告書（[15]:43頁）にある例（「食べる」と“eat”）を参照してほしい。「食べている」「食べる」「食べた」に与えたイメージ図が通俗的に単相（動きの継続、動きの始まりなど）を表しているのに対して、“eating”, “eat (s)”, “ate” に与えたそれは、通俗的に三相（動きは始まり、持続し、終わる）を表している。

「食べ（る）」は不変性群で動きの意味が作られている（食パン一枚モデル）。一方、“eat”（原形）は、不動性群が動きの意味を作っている（食パン一斤モデル）。このように考えると、英語にある現在完了形が日本語にないのは、動きの意味が単相であると解釈できる。

話しの時間表象については、知覚経験する「経験現在」（[1]:100頁）を、言語的表現の「ここ今」として、「より前」を、「回顧」、「完了」、「ちょっと前」、「ただ今」などの記号で表す。そして「より後」を、「予期」、「予想」、

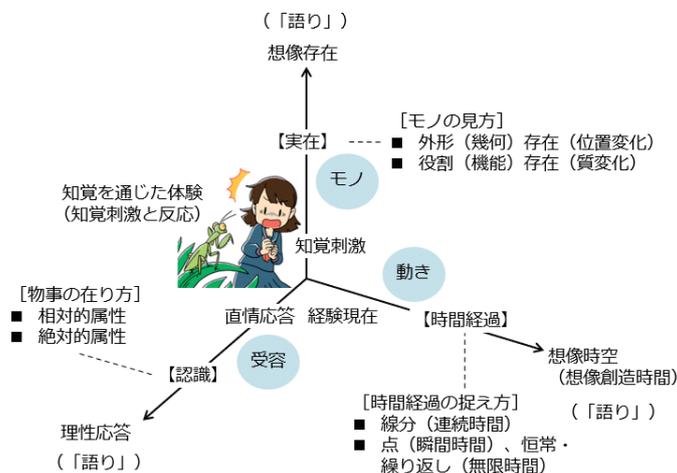


図3 経験現在（話し）と想像現在（語り）

「ちょっと後」、「直ちに」などの記号で表現する。

語りの時間表象については、大森のいう「境界現在」([1]:100頁)を、通俗的に「現在」で表し、「より前」を「過去」で、「より後」を「未来」で表すのだろう。

4 共感技法と意志技法

4.1 判断の手がかり

ベルクソンは「知性の本質は判断することであり、判断は主語に述語を付けることによってなされる」といい([5]:95頁)、続けて「主語はそれが名指しされるだけで不変となり、変化は主語に対して次々と確立される状態の多様性のうちにあることになる。」という。これは演繹的な思惟を指している。「変化は主語に対して次々と確立される」のは「より後」の時間経過であり、連続時間の中で継起する。大前提が在り、小前提が主語で指示(参照)され意味が決まると、大前提と小前提から結論を導く演繹的推論だ。

食パン一斤モデル([15]:39頁下段を参照)において、動きを理解する際、開始位置を固定化することは容易に理解できる。モノが外形(幾何)存在としてみなされ、時間経過が知覚できることから、「より後」の終了位置を見定めることができる、あるいは結果状態を目的と見做すことができる。判断手がかりは開始位置にあり、時間順行で決定論的に思惟が進む。

それに対して、食パン一枚モデルでは、モノが役割(機能)存在であり、経過時間が不定なので終了状態が固定化される。結果状態が判断手がかりである。そして当該の状態に至った原因・理由、あるいは(原因・理由—結果)の関係を、「より前」にある別の相対空間から選択的に見つけることで、動きを理解する。例えば、液相という相転移の状態が、気相からの転移なのか、あるいは固相からの転移の結果なのかは「より前」の状態に依存する。時間を逆行する確率論的推論である。

主語が特権的でなく主題という範疇を持つ日本語からみると、「は」は、拡張的推論の範囲を示す条件(あるいは認識する関係場の形成)のように解釈することができる。

4.2 2つの思惟方法と叙述

食パン一斤モデルの動きの世界では、「より後」の時

間経過が想像されるので、演繹的な推論が選好される。絶対空間と連続時間を背景として、「原因・理由—結果」の関係が在ることを念頭において、原因・理由が既知で、未知の結果を得る。その推移を叙述する。因果的推移で分析的推論である([15]:40頁上段を参照)。

それに対し、食パン一枚モデルの動きの表現世界では、「より前」の時間経過が想像されるので、帰納的な推論が選好される。相対空間と離散時間を背景として、結果が既知で、複数の「原因・理由」を仮定し、未知の「原因・理由—結果」の関係を得る。その推移を叙述する。選択的推移で総合的推論である([15]:40頁上段を参照)。

ところで確率の概念には二元性があることが指摘されていて、一つは、繰り返しの長期試行にみられる安定した頻度を表すもの(偶然に依拠する概念)で、もう一つはある事実について個人の知識やその事実を支持する証拠にたいする信念の度合い(認識に対する概念)である([21]:21頁~22頁)。確率論の中で、前者は、頻度主義と呼ばれ、後者はベイズ主義と呼ばれている([22])。

蓋然性に対する通俗的な見方、推測としての出来事生起の表現にもこの二重性が現れる。食パン一斤モデルでは、偶然に依拠する概念としての蓋然性の程度が直接、範疇化され、助動詞などで表されるだろうし、食パン一枚モデルでは、ある出来事⁷について個人が持つ知識や信念の度合いを直に表す蓋然性の程度が語形態に現れるだろう。今後、ライティング分科会では、これら思惟特徴と叙述表現の関わりについても詳しく調べる予定である。

4.3 言語的表現の叙述視点

自己を通じて言語的世界が表現されるのであるから、通俗的で日常普段の言語による表現世界は、「モノと動きに対する思いの適用」の在り方である。動きよりも位置に、変化よりも状態(質)に関心を持って作り出した時空間表現モデルと表現世界の間には二つある。

4.3.1 時間と空間に表現世界がある

通俗的な時間と空間に表現世界がある。言語による表現世界に先んじて時間と空間があるとする見方である。

7「の」は主観認識する事態をマークする。

絶対空間と連続時間が在るという見方である。食パン一枚モデルの表現世界である。時空間は存在論的なのである。

この見方では表現世界の認識主体は、表現世界から独立に在って、表現世界を外から眺め叙述する。モノは外形（幾何）存在が選好され、知覚できるモノが在るとの信念でモノの参照表現や指示表現が現れる。モノは外形（幾何）存在だから、その唯一性の点で特別な扱いを受ける。

思惟は因果的推移で、演繹的推論を選好する（頻度主義、決定論的な因果推論）。そして、「より後」、つまり時間順行を優勢とする叙述表現が好まれ、従って、「原因・理由」は作用因や動力因であり、「結果」は目的や作用結果に応じた意味と解釈される。作用・反作用の観念から被動対象がある。

統語上の特徴は、「原因・理由—動き（位置変化）（結果）」を反映したもので、主語—述語（動詞／目的語）・結果を顕すだろう。「原因・理由」は、意志、意図であり、「結果」は目的に対応する。

4.3.2 表現世界に時間と空間がある

言語による表現世界に通俗的な時間と空間がある。時間と空間に先んじて表現世界があるとする見方である。相対空間と離散時間が在るとする見方である。食パン一枚モデルの表現世界である。表現世界は存在論的なのである。

この見方では表現世界の認識主体は、表現世界の中に内在して、表現世界に身を置き叙述する。モノは役割（機能）存在が選好され、知覚し認識したモノがある在るとの信念でモノの参照表現や指示表現が現れる。モノは役割（機能）存在だから、その独自性が特別な扱いを受ける。

思惟は、選択的推移で、帰納的推論を選好する（ベイズ主義／尤度推定、確率論的な因果推論）。そして、「より前」、つまり時間逆行を優勢とする叙述表現が好まれ、従って、「結果」は、（原因・理由—結果の）関係の尤もらしさを表す条件を表す。（原因・理由—結果の）関係が確率的、あるいは帰納的なので間接作用の観念から付随対象⁸が在る。

8 「道を歩く。」「人生を生きる。」「成績を褒められる。」などを含めたラ格補語。

統語上の特徴は、「条件—関係（動き（質変化））・結果」を反映したもので、主題—述語・結果を顕すだろう。「結果」は（質変化後の）状態であり、「原因・理由—結果」は関係に対応する。

4.4 論じ語り方

共感技法と意志技法のそれぞれの論じ語り方をライティング分科会報告書（[15]：44頁～45頁）に整理して示した。事実と価値を主張する文章を対象として、価値を主張とする立場と、事実を主張する態度があることを前提に、共感技法は「相手との意志の統一を目的とする文章」に向く。一方、意志技法は「相手の見解の転換を目的とする文章」に向く。

共感技法の筋書は「起承転結」で、因果は未知で、確率論的に関係を仮定し、並列配置したうえで「より前」にある空間から選択的に尤もらしい関係を示す。その際、「転」は、尤もらしさの支持のため視点を変えて問い直す役割がある。

意志技法の筋書は「起承結」で、因果は既知で、決定論的に（原因・理由—結果の）関係を、「より後」の時間順序で連鎖させ結論に至る。

メタレベルの書き方規則をライティング分科会報告書（[15]：45頁下段）に示した。

5 おわりに

専門的な知識や学術的な英知は日常から離れることによって成り立っている。抽象化されたり普遍化されたりすることを目指す知で、科学や哲学で追求されるものだ。日常は、これら知識や英知で支えられているにも関わらず、生活の中の実用的実在論（[2]：189頁）や知っていることから知らないことを知る推論（[8]：39頁）が活躍する。言語的表現世界は普段の生活に役立つためにあり実践的であればよい。そして、ビジネス文章のような報告の言語的表現世界では、記号を通じてビジネス経験が正しく伝わるようなビジネス地図を照らす明燈であるべきだ。

本稿でみたように本質観念の二重性は至る所にある。これら二重性に目配りのきいた体系性を持つ言語システムはあるのだろうか。それは分からないが、少なくとも二重性の在り処と、その特徴を知ることが勿論、母語の



偏りを自己認識することが重要だろう。

例えば、演繹的思惟（食パン一斤モデル）の悪い使い方として、大局を言わず、局所的な原因・理由、粗末なのは、蓋然性の高い個人経験があることを示し（意志的経験と主張し）、結論を導くことである。一方、帰納的思惟の悪い使い方には、大局を言わず、局所的な結果、悪質なのは、在りもしない結果があることを示し、その結果に至る原因・理由があることを示したり、関係性があることを説明したりすることである。

参考文献

- [1] 大森壮蔵, 時は流れず, 青土社, 1996.
- [2] 大森壮蔵, 時間と存在, 青土社, 1994.
- [3] デイヴィッド・ドイチエ著, 林一訳, 世界の究極理論は存在するか 多宇宙論から見た生命, 進化, 時間, 朝日新聞社, 1999.
- [4] ウンベルト・エコ著, 谷口伊兵衛訳, 記号論 記号概念の歴史と分析, 而立書房, 1997.
- [5] アンリ・ベルクソン著, 原章二訳, 思考と動き, 平凡社, 2013.
- [6] 九鬼周造著, 小浜善信編, 時間論, 岩波文庫, 2016.
- [7] 内井惣七, 空間の謎・時間の謎 宇宙の始まりに迫る物理学と哲学, 中公新書, 2006.
- [8] S.I. ハヤカワ著, 大久保忠利訳, 思考と行動における言語 原書第四版, 岩波書店, 1985.
- [9] スティーブン・マンフォード、ラニ・リル・アンコム著, 塩野直之 谷川卓訳, 哲学がわかる因果性, 岩波書店, 2017.
- [10] 船橋新太郎, 渡邊正孝編集, 情動と意志決定 感情と理性の統合, 朝倉書店, 2015.
- [11] 宮本啓一、石飛道子, ビックリ! インド人の頭の中 超論理思考を読む, 講談社, 2003.
- [12] 宮本啓一, インドの「多元論哲学」を読む, 春秋社, 2008.
- [13] 米盛裕二, アブダクション 仮説と発見の論理, 勁草書房, 2007.
- [14] 早島理, “刹那滅と輪廻轉生 “a d h y a t m i k a k s a n i k a t v a” --Mahayanasutralamkara 第 XVIII 章 第 84 ~ 88 偈の解説研究,” 長崎大学教育学部社会科学論叢, 1995.
- [15] 特許情報研究所, “令和元年度産業 日本語研究会 報告書 「産業日本語」,” 一般財団法人特許情報機構, 2020.
- [16] 日本語マニュアルの会, “日本人のための日本語マニュアル (暫定第 1 版),” 11 2018. [オンライン]. Available: <http://ngc2068.tufs.ac.jp/nihongo/htdocs/>.
- [17] 佐野洋, “文書作成モデルと思考様式、言語表現,” Japio YEAR BOOK 2019, 日本特許情報機構, 2019.
- [18] 特許情報研究所, “平成 30 年度 産業日本語研究会 報告書 「産業日本語」,” 一般財団法人 日本特許情報機構, 2018.
- [19] 松村道一著, 脳科学への招待 神経回路網の仕組みを解き明かす, サイエンス社, 2002.
- [20] 秦宏一, 英語動詞の統語法 日英語比較の新たな試み, 研究社, 2009.
- [21] イアン・ハッキング著, 広田すみれ・元良太訳, 確率の出現, 慶応義塾大学出版会, 2013.
- [22] エリオット・ソーバー著, 松王政浩訳, 科学と証拠, 名古屋大学出版会, 2012.
- [23] アンリ・ベルクソン著, 杉山直樹訳, 物質と記憶, 講談社学術文庫, 2019.
- [24] クリストファ・バーナード著, 英語句動詞文例辞典一前置詞・副詞別分類, 研究社, 2002.



5

産業日本語関連

